

三浦按針講演会 @伊東ふれあいセンター3階(2018年8月4日、5日、10日)

| 主題 | 予定 | 時間 | 講演者 | 講演者から情報: ①演者の肩書 ②演題名 ③概要・内容 | 来場者の反応 |
|--------|-----------|-------------|---------------------|--|---|
| 帆船の魅了 | 8月4日(午後) | 13:00～13:45 | 國枝 佳明 | ①:東京海洋大学 学術研究院 海事システム工学部門 教授 ②:「三浦按針と帆船…そして帆船の魅力」 ③:三浦按針の建造した日本初の洋式帆船では、日本人乗組員に対する訓練が行われましたが、成功しなかつたようです。400年の時を経て日本で行われている帆船訓練は、船舶運航に関する知識及び技術とともに、いわゆるヒューマンスキルの習得にも成果を上げています。そんな帆船と帆船訓練の魅力をお伝えいたします。 | 歯切れの良い明快な帆船の説明に、帆船教育・海洋大に関心が集まつた。「海洋大に進学したい！」と言う子供がいた。 |
| | | 14:00～14:45 | 庄司 邦昭 | ①:東京海洋大学名誉教授 ②:帆船の系譜 ③:三浦按針が伊東で造った船は、どのような船だったのか。按針が来日した「リーフデ」や、この頃までに進化した帆船について、その系譜を追ってみたい。 | 丁寧な説明に、船の系譜に対する関心が高まつた。 |
| | | 15:00～15:45 | 西川明那 | ①:東京湾水先人会 二級水先人（現役女性Pilot） ②:「按針の後輩として～水先人(海のパイロット)とは～」 ③:日本初の水先人であったとされる三浦按針。彼の職業である水先人(海のパイロット)とは、いったいどんな仕事なのか？その仕事内容を紹介します。 | 水先人という職業を知らない人が多かつたが、歯切れよく職務を説明され、非常に好評だつた。 アンケートでは「女性初の水先人として、自信に満ち輝いて素晴らしい！」との声。 |
| 松川造船の謎 | 8月5日(午後) | 13:00～14:00 | 福地 章 | ①:海技大学校名誉教授 福地 章 ②:「私の按針」 ③:「1600年、オランダ船「リーフデ号」が西回りの航路を経て苦闘2年の歳月の後、日本にたどり着いた。時あたかも天下分け目の戦い、関ヶ原のわずか半年前であった。乗船していたウィリアム・アダムスの運命や如何に！このイギリス人がなぜ私の郷里横須賀の土地に眠るようになったのか、青い目の侍となった三浦按針（アダムス）について話します。」 | 横須賀出身の講演者の説明に、按針を身近に感じたとの声。 締め括りの「按針贊歌」のアカペラに、観衆は拍手大喝采だつた。 |
| | | 14:00～15:00 | 伊藤 稔 | ①:ヘダ号再建プロジェクト会/信州大学名誉教授 ②:日本近代造船の礎:ヘダ号の設計図を復元する ③:幕末の沼津市戸田(旧戸田村)における洋式帆船ヘダ号の建造は、日本近代造船の礎として明治期の産業革命を導く画期的な出来事であり日本とロシアの交流のはじまりでした。この歴史上重要な意義をもつヘダ号に関する多くの資料や記憶が失われつつあるとき、それを掘り起こし、復元という形で後世に残すのは今をおいて他にないように思われます。 | 伊東・松川河口での西洋式帆船2隻及び安宅丸建造との繋がりについても触れた。 今回の展示会のメインテーマでもあり、伊東先生の視点と見解は、伊東の関係者・市民にも大きなインパクトを与えた。 今後も、この謎への深堀り・調査を、市役所にも提案した。(市の要請に応じた今回の事業報告書にて) アンケートでも、右岸・左岸論争の継続を望む声。 |
| | | 15:00～ | 岡村宗一 | パネル・ディスカッション（岡村会長は、体調不良で欠席。急遽、伊東氏、澤間氏、米村氏、森氏、藤田の5名 | |
| 英語教育 | 8月10日(午後) | 13:00～13:45 | George Meegan (英国人) | ①:元神戸商船大英語教師(按針生誕地ギリンガム出身・アルゼンチン・ウシュアイア～アラスカ:7年3万キロ徒步旅行冒険(ギネスブック)) ②:「Be adventurous！」 ③:自らの体験、冒険家・神戸商船大での教鞭を通して、若者に問いかける。→”按針”の様に冒險心を持て！ | Meeganの纏まりのない英語での話題と、下手な解説に不評に終わった。 やはり、ビデオ対応ではなく、本人登場かせてSkype対応で臨場感が必要と反省。 朝日新聞が彼の冒險人生に興味を示し、取り扱いを検討中。 |
| | | 14:00～14:45 | 斎藤 浩一 | ①:国立大学法人 東京海洋大学 海洋工学部 海事システム工学部門 准教授 ②:「伊東市と翻訳:英学史の視点から」 ③:「日本人と英語」という独自の視点から、伊東市の持つ歴史的意義を紹介することを目的としています。具体的には、伊東市と深い関わりのある三浦按針、エドモント・ブランデン、中野好夫の三者に焦点をあてながら、ややもすればバラバラに捉えられがちな彼らの功績を一本の線で結びつけることを試みます。「英語と伊東市」という発想から、彼らの功績を再解釈することで、従来の歴史像では捉えられなかつた、新たな伊東市の姿 | 按針の英語学史での評価、加えて伊東市と翻訳との新しい視点、更に講師の熱意に満ちた説明に、評価が高く更なる説明を期待する声が多かつた。 |
| | | 15:00～15:45 | 森 純男 | ①:元・日本郵船船長、伊東歴史観光案内人会長 ②:三浦按針(ウィリアムアダムス)が通った全航程を検証する。 ③:30年間44隻の外航船乗船実歴と35年間のヨット乗船経験から、船乗りとして三浦按針の精神的な拠り所を探る。 | 航海者としての按針に興味を示し、大航海の困難さと、それを乗り越えた按針に称賛の声。 航海を、海象(海潮流)と気象(気流、季節風)からの分析に、興味を集めた。 |